

中学生の頃、元々手先が器用なこともあり、鋸や金槌を握っては木工作の真似事を良くしていた。ある時期、きっかけはよく憶えていないが、絵の「額縁」作りに熱を入れていた時がある。一つ作っては、次はもっと良いものを・・・とエスカレートしてゆき、次々と作り続けていたようだ。遂にはガラス屋さんに行き額縁に入れるガラスをわざわざ切つてもらつたりもした。さていよいよ本格的にのめりこんだのは良いが一方で額縁の中に入れる絵の収集の方がこれに追いつかない。古い雑誌や新聞を切り抜いたりしていたが、遂には一番手っ取り早く美術の教科書から絵を切り抜いた、一番効率が良く印刷は最高に綺麗だった。この頃から額縁に飾るために絵を集める・・・というよりは、絵をたくさん集める事自体に熱が入り始めた。そういえば小学生の頃から「切手集め」に興じ、切手の中の美しい写真や絵等から世界の国々・人物、自然・動植物・歴史をしては、想像を膨らませていた。娯楽という手段の殆んど無かった我々の年代の多くが経験した事だ。何かを集めるというのは趣味の中ではもっとも安易で取つ付き易い。

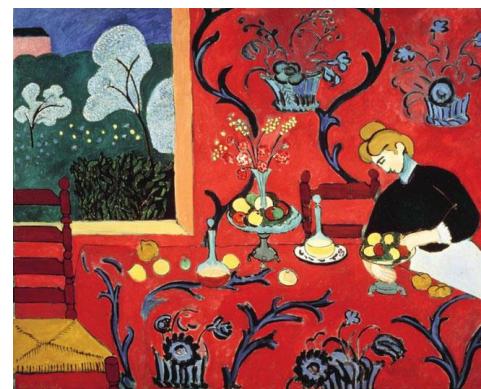
さて絵の収集も何百枚にも及んだのだろうか、いよいよ佳境に入ると、不思議な事に何だか「絵」の本質のようなものが次第に見えてくる様な気がし始めた。それは後期印象派と呼ばれる世代、セザンヌ、ゴーギャン、ゴッホ達、そして20世紀に入つてのピカソ、シャガール、ミロ、

ルオー、クレー、マティス、モンドリアン……に至る「近・現代絵画」に強烈に引きつけられる何かを感じたのだ。

クレー



マチス

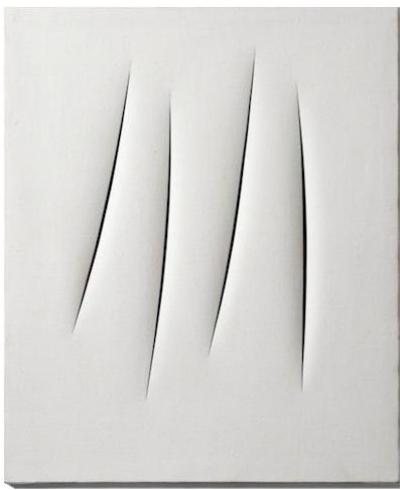


写実主義の時代には無い、絵の中に滲み出でている作者の「心・意思」を感じられたのだと思う。不遜な言い方になるかもしれないが、体中がビリビリと震え、「絵が判りはじめた」瞬間であった。

そして遂には、第二次大戦後に台頭し始めた「モダンアート」曰く、フォートリエ、フォンタナ、日本で言えば山口長男、斎藤義重、菅井汲、脇田和・・・・等の抽象画には体を揺さぶられるような感動・共感を覚えた。

フォンタナ

斎藤義重



こんな絵を描いてみたい・・・と言う事はこの頃から所謂抽象画の本質の中に入り込んでいたのではないかと思う。そんな事などがあり、15歳の若さで抽象画の世界に導かれていた。この時期たまたま学生の絵画コンクールがあり、応募した一点が中学の部日本一になった。その時の絵は流石に抽象画ではなく工場の風景だったが、建物や煙突を「抽象的心」で自由に捉えた絵であった。自分の賞状・賞品もさることながら「学校賞」も頂き大きな幻灯機を学校に持ち帰った事が晴れがましかったのを憶えている



厚生大臣賞受賞

1959年当時の絵の写真がありました

良く絵の才能は天性の成せる業、或いは遺伝、幼少期の特訓などに依ると言われるが、僕の場合で思い返せばそのいずれも全く当てはまらない。敢えていうなら幼少期の特訓に当たるのが単なる「15歳の収集癖」ではなかつたのか。曰くあの時の「何百枚かの絵の切り抜き」が僕の脳

のある部分のスイッチに火を点けたのではないかと思う。世によく言う常識を超えた繰り返し・努力が人知を超えたとんでもない異変・成果を生む。

高校になると迷う事無く美術部に入り油絵を始めた。油絵のマチエールは抽象画の本質と完全に一体化していた。その後油絵だけでは物足らず、油絵の具に砂粒を混ぜたり、砂粒をボンドで溶いてそのままキャンバスに描きなぐつたりもした。同時に描くキャンバスも小さな物では飽き足らず、30号、50号、100号と大きくなつていった。大学時代下宿先ではとても絵の作業は出来なかつたが学校の美術部室では汚れる事も、後始末も気にすることなくバリバリ描きまくつた。真夏の暑い時も汗を噴出しながら美術部室でパンツ一丁になり描いた。この事が抽象の本質である「自分・私の表現」を確実に実感できる一瞬だったような気がする。高二の頃から恐れも知らず福岡県美術展に応募し始め、大学を卒業するまで毎年入選或いは入賞も果たした。卒業後入社した会社が山口県にあり、山口県展にも引き続き出品し毎回入賞し、遂には県展の準招待作家の栄誉も頂く事になつた。

「抽象画」を解説するのに一般では良く、具象的な物体を「私」の目を通して違つた形で或いは崩して、表現しているのだ・・・と言われる事が多い、そこでよく取りざたされるのがピカソの絵の変遷であるが、本当にそうなのだろうか?

違った形の中に何か新しい発見があるように思える、又崩れた形の中  
に何か物の本質が見えるような気がする。それだけの事なのだろうか?  
例えば絵の公募展などでの上位入賞作を順に見ても、僕にも十分納得で  
きる。僕がもし力量の有る作家ならやはりあんな絵を描くだろう、又僕  
が審査員でもやはりあの絵を選ぶだろう・・・曰く、「抽象」を理解して  
いる人が結構多いのに驚かされる。唯、最近の絵の傾向が結構変わつて  
きているのも重大な事実である、いうなれば時代の要請・影響も影響す  
る

ちょうど日本の美術学校を卒業しフランスに渡った若い卵達がパリの  
現代美術の台頭にすっかり心奪われ、今までの自分の画風を一挙に変え  
ざるを得なかつたたくさんの画家達の心境に良く似ている。

心も少し落ち着き、ローカルではあるが僕も会社の美術展や市の美術展  
にも出品し「社長賞」や「市長賞」などを何度も頂いた。

「絵」

アトリエの絵の具散乱 梅雨墨り

左拳のデッサンばかり大嘆

くさめ

テレビンの臭いに噎せてパリ描く

む

さくろ

石榴描く実も背景も火の如く

パステルは裸婦の線なり秋の色

裸婦描く パステルの色決めかねし

パステルの色して光る裸婦の肌

裸婦モデル 目は一点の若葉窓

ストーブの暖氣に蒸せて裸婦描く

テレピンとストーブ匂い 裸婦を描く

画布擦るナイフの火照り裸婦描く

春の風ヌードデッサン画鉛飛ぶ

花冷えや不安定なる裸婦を描く

アトリエの塑像の埃 (ほこり) 半夏雨

描きかけのキャンバスばかり春時雨

裸婦の絵は未完のままに秋深し

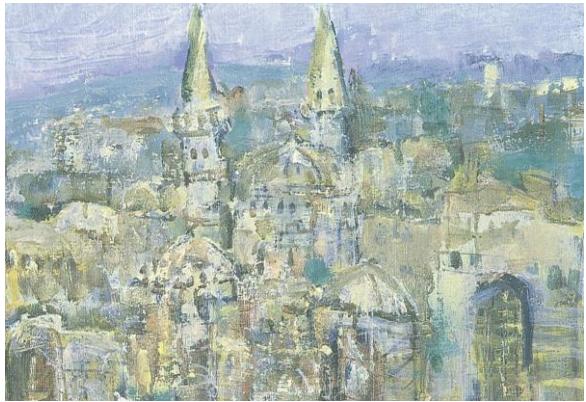
未完の裸婦夏の埃の溜まるまま

絵画展



ボスフォラスの港 F 8

薔薇展と並んで 我の絵画展  
広過ぎる個展の部屋に薔薇飾る  
初個展 春正装し妻も立つ  
わが個展 妻の新茶に人気あり



モスクのある家並 F 15